

<資料16> 令和6年度 AIE国際高等学校 学校評価総括表

教育目標	高い問題意識と感性を有する若者を受けとめ、自国の文化・歴史に誇りを持ち、広く世界に関心の目を向けて社会の問題に気づき、それを解決しようと努力する熱意と能力を持つ使命感溢れる国際人を育成する。(学則第1条)
目指す学校像	豊かな感性をもった若者が新しい自分を発見し、広く世界に貢献しようとする意欲と能力を開花させる学校。
Learner Profile (目指す生徒像)	
Knowledgeableー知性ー	広くバランスのとれた学問領域について理解と知識を深めようとする人
Harmoniousー協調性ー	自分の意見を持ちながら、他者の意見も尊重し、協力し合いながら効果的にものごとに取り組める人
Risk-Takerー挑戦ー	困難や、不確実性に勇気をもって臨むことができる人、自分の信念を恐れずに明言し実践できる人
Balancedーバランスー	体と心のバランスを重視し、肉体も人格の一部として大切にすること
Sensibleー感性ー	目に見えないものを感じ、それに価値をおき、理解することよりも、信じることに重きをおける人
Resilientー再起力ー	困難な状況の中でも、何らかの前向きな意味を見出す気質を持っている人
Caring & Humbleー他者配慮ー	思いやりと謙虚さを持った人、他者の気持ちに共感し、慈悲の心を持つ人
基本方針	
①学び合う	教える者は学ぶ者。学ぶ者は教える者。この精神のもと、生徒と先生と一緒に校風を創ります。先生は師であるとともに、同じく人間として成長しようとする友です。
②コミュニケーション能力を育てる	コミュニケーションとは、“人と関わること”。相手の気持ち、メッセージを正しく受けとめ、また、自分の思いを分かりやすく表現し、対話を深めていく力を育てます。そのために、母国語を基盤とする“言葉の力”を大切にします。
③多面的にチャレンジする	色々な自分を発見するために、様々な分野にチャレンジします。スポーツ・音楽・絵画・ガーデニング・茶道・演劇・討論etc. 多彩な活動、イベントを通して新しい自分に出会います。
④国際的志向を高める	グローバルな時代にあって、広く世界に関心の目を向け、“国際社会の一員になろうとする気持ち”を育てます。母国語をしっかりと理解しながら、異なる国との関わりを学ぶ能力を高めるのが目標です。
⑤悩む力・考える力・乗り越える力	“悩むべきことに悩む”のは能力です。その感性を大切にしながら、その問題から逃げずに考え続ける力、そして、それを乗り越えていく力を育てます。問題に気づき、解決していく、強く柔軟な心の姿勢を育てます。
⑥基礎から始める	嵐が来ても根がしっかりとした木は倒れません。何事においても、しっかりした基盤があつてはじめて応用力を発揮することができます。特に学習面においては、基礎からいねいに学ぶことを大切にします。
前年度の課題と評価	教育理念:2023年度は、「あなたが創る・あなたを創る」の教育理念が多様な取り組みを通じて具現化された。特に生徒の主体性を育む校風が形成され、生徒やOBの思いを反映した校歌作成、国際交流や英語演劇、夏期留学を通じた国際性の育成、ボランティア+αクラブ・ディベートクラブ設立による社会課題への主体的行動の場の創出、Familyの会活動やガーデニングでの多世代交流などが展開された。 教育活動:教育課程は適正に編成され、少人数クラスは生徒にとって落ち着いた学習環境を提供している。IBDPコースの充実やサッカー部の目覚ましい活躍は、他の生徒への好影響も期待される。学校PRや地域交流も再開され、生徒の地域でのボランティア活動の広がりも良い学びと経験に繋がっている。一方で、活動をより活発に継続するには、ホームページやSNSを用いた幅広い層への周知の徹底する必要がある。 学校としての体制の確立:校内外での生徒の安全確保、情報発信の改善、寮運営に関する危機管理マニュアルの見直しと更新がされた。生徒数増加に伴う教職員への負担が懸念され、きめ細やかな教育のためにも適正な人員配置が継続的な課題である。多様な背景を持つ生徒への配慮もより必要となってくる。また、自然災害の頻発化を受け、寮における一層の危機管理の徹底も求められている。

学校自己評価(令和7年6月14日実施)			学校関係者評価 (令和7年6月27日実施)	
評価項目	評価		評価(結果・分析)及び意見等	
	項目総合			
教育理念				
理念の浸透	A		学期開始時のオリエンテーションでは、新入生を含む通学生全員で、本校が目指す学習者像である「Learner Profile」について確認の時間を設けた。学校行事・部活動などの課外活動では、「Learner Profile」の実践を意識して生徒は目標を立て、振り返りを行うことで浸透を図っている。今年度から、レジデンス・週5日通学・週3日通学の生徒対象に哲学カフェを実施。「自分自身を知ることとは可能なのか？」といったテーマで白熱したディスカッションを行うなど、生徒が自身の考えを深める機会を提供した。年度の締め括りには「克己」をテーマとしたスピーチコンテストを行い、生徒たちが1年間の学びや成長を振り返り、言語化する場とした。	日々の学生生活における多岐にわたる活動の根本に、教育理念が深く込められていると感じられる。教育理念である「Learner Profile」は明確にされ、それに基づいて様々な活動が有機的に結びついて実施されている。机上の学習にとどまらず、地域、さらには世界へと視野を広げるための多種多様な取り組みが数多く実行されている。将来を見据え、視野を広く持ち、また地元コミュニティや家族への感謝の心を意識できる良い機会が多く与えられている。哲学カフェのような場では、リラックスした雰囲気の中で自己探求の機会が提供されている。生徒の主体性を大切にしながら、課題解決に向けた生徒同士の協働的な学習が実施されており、高く評価できる。生徒が意欲的に学べるようなカリキュラムが提供されており、その点も評価されている。本校の特色である国際バカロレアは、他校との連携によってさらに深化しており、また様々な研修を通じて教員の専門性が向上し、教育の質が高まっていることも評価できる。
理念の実践	A		本校の学習者像「Learner Profile」に基づき、生徒の主体性を引き出す多様な活動を実施した。特に「ボランティア+αクラブ」では、生徒自身が気づいた課題解決のために実践的な活動を展開した。例えば、若者の投票率に問題意識を持った生徒が、18歳以上の生徒への選挙参加を呼びかけるポスター制作や、寮生の期日前投票に関する情報発信を行った。また、英語劇やスポーツ大会といった主要行事の企画・運営を生徒に委ねることで、一人ひとりが「学校の創り手」としての当事者意識を育む機会を創出した。	国際情勢が刻々と変化しており、体験留学や海外進学に慎重にならざるを得ない状況が増えることが危惧されるなか、広い視野を持った真の国際人の育成に引き続き取り組むべきである。机上の学習にとどまらず、地域や世界へと視野を広げるための多種多様な取り組みが数多く実行されており、その一環として「AIE夏期体験留学」の実施や、在大阪スイス領事館訪問での英語によるインタビューなど、実践的な国際交流が行われている。
国際性の涵養	A	A	生徒の国際的志向を高めるための機会を積極的につくった。米国ワシントン州のEFシアトル校と提携し、「AIE夏期体験留学」を実施。約2週間にわたり、生徒たちはエバーグリーン州立大学の寮で生活しながら、世界中から集まった留学生と共に語学クラスに参加。さらに、現地でのトリップやボランティア活動など、教室の外での多様なプログラムも体験した。文化や言語の違いに戸惑いながらも、英語でコミュニケーションをとろうとしたことは、チャレンジ精神を養う異文化体験となった。また、国内においても在大阪スイス領事館を訪問し、生徒自身が英語インタビューを企画・実施するなど、より実践的な国際交流を推進した。これらの取り組みに加え、海外指定校推薦の提携校も拡充し、生徒がより広い視野で海外進学を目指す環境づくりに努めた。	サッカー部のインターハイ予選での応援は、AIEファミリー、和太鼓部、生徒が一体となる機会となり、高校生の良い思い出になった。また、サッカー部の活躍はすばらしく、学校全体の活力を高めるとともに、地域の方々にもAIEをより知ってもらい一体感を深めることにつながっている。ガーデニング活動には生徒やOBも参加し、主体的に動いてくれたことが喜ばしく、今後も楽しくなる機会を色々と考えたい。生徒と保護者による石けん教室が開催できたことについても感謝が述べられている。少人数でアットホームな学び場である反面、様々な地域に暮らす保護者同士が交流できる機会は少ない。しかし、「ファミリーの会」を継承し、SNSなどを活用したオンラインコミュニティも有意義に機能しており、生徒、OB、保護者が互いに交流し合える場となっている。これは保護者同士にとっても心強く安心感に繋がる。
学校コミュニティーの発展	A		本校を取り巻く多様なコミュニティとの連携を一層深めた一年となった。保護者有志による「Familyの会」は、月1回のガーデニング活動を継続。在校生やOBの保護者、生徒も参加する、世代を超えた交流の場となっている。また、SNSを活用して遠方の保護者も繋がるオンラインコミュニティを運営し、交流の機会を広げた。地域社会との繋がりにおいては、サッカー部の活躍が大きな役割を果たした。インターハイ予選準決勝、選手権予選決勝への進出は、生徒や保護者、OB、学校関係者など学校全体で応援する一体感を生み出した。さらに、国際バカロレア校のコミュニティにおいても連携を深めた。定例のIBワークショップやネットワークミーティングへの積極的な参加に加え、他校のIB教員から指導法を学ぶ研修機会を設けるなど、教員の専門性向上にも努めた。	

日々の学生生活における多岐にわたる活動の根本に、教育理念が深く込められていると感じられる。教育理念である「Learner Profile」は明確にされ、それに基づいて様々な活動が有機的に結びついて実施されている。

机上の学習にとどまらず、地域、さらには世界へと視野を広げるための多種多様な取り組みが数多く実行されている。将来を見据え、視野を広く持ち、また地元コミュニティや家族への感謝の心を意識できる良い機会が多く与えられている。哲学カフェのような場では、リラックスした雰囲気の中で自己探求の機会が提供されている。生徒の主体性を大切にしながら、課題解決に向けた生徒同士の協働的な学習が実施されており、高く評価できる。生徒が意欲的に学べるようなカリキュラムが提供されており、その点も評価されている。本校の特色である国際バカロレアは、他校との連携によってさらに深化しており、また様々な研修を通じて教員の専門性が向上し、教育の質が高まっていることも評価できる。

国際情勢が刻々と変化しており、体験留学や海外進学に慎重にならざるを得ない状況が増えることが危惧されるなか、広い視野を持った真の国際人の育成に引き続き取り組むべきである。机上の学習にとどまらず、地域や世界へと視野を広げるための多種多様な取り組みが数多く実行されており、その一環として「AIE夏期体験留学」の実施や、在大阪スイス領事館訪問での英語によるインタビューなど、実践的な国際交流が行われている。

サッカー部のインターハイ予選での応援は、AIEファミリー、和太鼓部、生徒が一体となる機会となり、高校生の良い思い出になった。また、サッカー部の活躍はすばらしく、学校全体の活力を高めるとともに、地域の方々にもAIEをより知ってもらい一体感を深めることにつながっている。ガーデニング活動には生徒やOBも参加し、主体的に動いてくれたことが喜ばしく、今後も楽しくなる機会を色々と考えたい。生徒と保護者による石けん教室が開催できたことについても感謝が述べられている。少人数でアットホームな学び場である反面、様々な地域に暮らす保護者同士が交流できる機会は少ない。しかし、「ファミリーの会」を継承し、SNSなどを活用したオンラインコミュニティも有意義に機能しており、生徒、OB、保護者が互いに交流し合える場となっている。これは保護者同士にとっても心強く安心感に繋がる。

学校自己評価(令和7年6月14日実施)			学校関係者評価 (令和7年6月27日実施)	
評価項目	評価		評価(結果・分析)及び意見等	
	項目	総合		
教育活動				
カリキュラムの充実	A	A	生徒の実力を客観的に把握するため、模試や英検模試などの定期的な試験を行い、日頃の学習成果を確認する機会を設けた。また、国内大学入試において英検の重要性が増す中、英検取得の3年間の計画表を生徒たちに配布し、各自に計画を立てることを促した。長期的に英語力向上に努める意識喚起を行った。加えて、前年度に引き続き、教養を深める機会提供のため、秋には福島美和先生(元 神戸工科芸術大学 講師)を招き、特別アート講座を5回シリーズで実施し、芸術を鑑賞する視点を学んだ。	生徒が各自で英検取得の3年間の計画表を立てる取り組みは、生徒の主体性を育むことにつながっている。また、淡路島を題材にした「地域理解」「地域貢献」「地域での活躍」の活動は特色ある取り組みである。NPO「うず潮を世界遺産にする淡路島民の会」と連携した海岸清掃活動などは、生徒たちにとって地域資源を理解しながら貢献できるいい学びの機会になったと思われる。 所属コースに関わらず、課外活動に参加できる機会が増えることを引き続き希望する。生徒が様々な経験を積む機会づくりとなっている。IBDPやサッカー部の活躍に目が向きがちであるが、全日制とは異なり通信制しか選択できなかった事情のある生徒が多数いることも事実である。そのような学生にも、今までと同様に丁寧なサポートに取り組むことが期待される。個人へのサポート体制は、これまでの実績を踏まえながら年々充実している。
課外活動の充実	A		淡路島という地域性を活かし、「地域理解」「地域貢献」「地域での活躍」に基づいた活動を充実させた。寮生向けの淡路島トリップで地域理解を深める一方、「ボランティア+αクラブ」はNPO「うず潮を世界遺産にする淡路島民の会」と連携した海岸清掃活動に参加。この活動は渦潮見学といった探究学習にも発展し、生徒に大きな刺激を与えた。さらに、サッカー部が県大会で準優勝という快挙を成し遂げ、地域に活気をもたらした。選手たちはスポーツだけでなく地域貢献活動にも取り組み、社会への貢献意識を高めた。	カウセリング体制は、これまでの実績を踏まえながら年々充実している。進路へのビジョンが見えやすくなる機会づくりに向けての努力が見える。今後の進路については、偏差値や評価だけではなく、一次産業を含めた社会全体への貢献になることも視野に入れたビジョンを持てる機会があることが望ましい。個々の将来、及び今現在、地域にそれぞれが貢献できることは何かについて考える機会が与えられている。
個別サポートの充実	A		生徒指導においては、寮生・通学生を対象にアカデミックカウンセリングを行った。学期開始時には目標と計画の設定、学期途中には進捗確認、学期末には保護者も交えての三者面談を行い、いい習慣を身につけられるように指導に当たった。通信・オンライン生には集中スクーリング時に個別面談を実施し、進路指導等を行った。引き続きオンライン学習プログラムを提供し、多様な学習スタイルの生徒へのサポートを充実させた。加えて、生徒へのカウンセリング力向上のため、定期的に教職員はミーティングや研修を行った。	進路指導においては、3年生の通学生には定期的な面談が行われ、通信・オンライン生には集中スクーリング時に進路面談などがなされている。また、1・2年生に対しても早期からの進路ガイダンス等が定期的に行われている。生徒の視野を広げ、多様な進路選択ができるように、具体的な機会が提供されていることは評価できる。海外の新たな指定校として、世界大学ランキングトップ100内に位置するモナッシュ大学を含む3校と新たに提携したことは、生徒の新たな意欲を育むとともに、進路の選択肢が広がることであり、評価できる。
カウンセリングの充実	A			生徒が個々の将来や地域貢献について考える機会を通じて得た内容が、綿密な報告により保護者にも共有されている。保護者との連携では、電話やメール、Classiを使って密に連絡がなされており、通信制の生徒の保護者へのサポートにも感心する。特に、オンラインによる学期末面談の実施は、遠方の保護者も参加しやすく、面談対象者のほぼ全員と面談ができたことは評価できる。
進路指導の充実	A		3年生に対しては、各生徒の進路希望を確認し、通学生には定期的な面談を、通信・オンライン生には集中スクーリング時に進路面談を実施した。一方、1・2年生には早期から進路意識を高めるため、進路ガイダンス等を定期的に行った。また、生徒が国内外に視野を広げ、多様な進路を選択できるよう、具体的な機会の提供にも力を入れた。関西大学社会学部の永富真梨教授による模擬授業や、河合塾主催のオンライン大学合同説明会「ユニフェス」、自校での留学フェアなどを開催。さらに、海外進学の実践機会を拡充するため、指定校の新規開拓も継続的にを行い、本年度は世界大学ランキングトップ100内に位置するモナッシュ大学を含む3校と新たに提携を結んだ。	
保護者との連携	A		電話、メール、Classiを使い、保護者と密に連絡を取り合うことを心がけた。また、学期末面談をオンラインで行うことにより、遠方の保護者も参加しやすくなり、面談対象者のほぼ全員に学期末面談を実施した。また、それ以外でも必要に応じて各生徒・保護者との面談の機会を持った。	

学校自己評価(令和7年6月14日実施)			学校関係者評価 (令和7年6月27日実施)	
評価項目	評価		評価(結果・分析)及び意見等	
	項目総合			
学校としての体制の確立				
適切な教育課程の編成	A	A	教育課程は、内閣府に認定された特区計画申請書および、文科省に確認された教育課程表に従って適正に編成している。なお、2022年度入学者より新学習指導要領の施行にともない、本校でも新課程で各教科を実施した。また、履修モデルを8パターン作成し、年度末に生徒への周知の上、希望調査を行い、それぞれの興味・進路に応じた履修モデルを提案した。	教育課程は、法律に基づいて適正に編成されており、特に生徒の興味や進路に応じた8パターンの履修モデルは生徒の進路選択において参考になると思われる。また、様々な受講スタイルが用意されていることで、個々の状況や体調に合わせて学習できる。地域に関わる活動は、これからの人材育成、また生徒自身の自己実現や自己肯定感に連動していると確信されており、今後も規定している。
適切な面接指導・添削指導等	A		面接指導・添削指導等は、学習指導要領及び学校教育法、その他関連法、高等学校通信教育の質の確保・向上のためのガイドラインに則って実施した。	面接指導・添削指導等も、ガイドラインに則って適正に実施されており、評価できる。
適切な教職員の配置と組織運営	A		適切な教職員の配置と組織運営については、少人数クラスを維持して教育の質を高めるように努めた。添削指導のための非常勤の教員2名と事務職員3名を増員し、生徒数の増加に対応した。	生徒やサッカー部員の増加に対し、様々な対応に尽力されており、質の高い共育を目指していることが伝わる。個別への細かい対応もさらに充実しており、この点は評価できる。昨年度は生徒数増加の状況を踏まえ、教員の配置等の対応がなされた。引き続き、一人ひとりに応じてきめ細やかな指導ができるよう、対応が求められる。
危機管理について	A		危機管理については、文部科学省によるガイドラインに沿って当校の危機管理マニュアルを随時更新している。設備点検も定期的の実施している。寮運営に関する危機管理マニュアルの見直しと更新を行った。	地震や津波等の自然災害が危惧されており、非常時に対応した危機管理を引き続き行うことが求められる。
学校評価の実施	A		情報提供は、ホームページやSNS、紙面での活動報告を行っている。在校生、保護者へはClassiを活用し、より円滑に情報を提供。また、電話、メール、Classiで情報交換を密に行い、保護者から意見を取り入れ、学校全体の活動に反映させた。	ホームページやSNS等を通して学校生活の様子を知ることができ、情報発信が適切に行われている。Classi等を活用し、生徒や保護者と密な情報交換がなされ、保護者からの意見を反映した活動も行われている。これらの取り組みから、生徒や保護者とともに学校を創る姿勢の一端がうかがえる。また、PTA活動が廃止になる学校もある中で、「Familyの会」が活発に情報発信しているのは素晴らしいことである。
適切な情報提供と意見等の取り入れ	A			地域への活動参加もさらに広げられており、淡路島への貢献が次世代のグローバルな若者育成に繋がっていくことが期待されている。地域の行事などにも頻繁に参加できることで、生徒が自分たちが受け入れられていると感じ、地域での居場所という意識を持つことができ、精神的な平穩に繋がるのではないかと考えられる。卒業生やその父兄も巻き込んだAIE関係者の交流の場になることが望まれる。
地域との連携	A		2024年度は、生徒たちが地域の様々な活動に参加し、地元・淡路島の方々との交流を深める一年となった。阪神・淡路大震災の追悼行事には寮生活を送るレジデンス生やサッカー部員が参加。和太鼓部員は地元のお祭りで演奏を披露するなど、地域の行事に積極的に関わった。特に「ボランティア+αクラブ」の生徒たちは、NPO法人「うず潮を世界遺産にする淡路島民の会」が主催する「3海峡クリーンアップ大作戦」に運営メンバーとして参加。岩屋海岸の清掃活動に汗を流した。この企画をきっかけに、同NPO法人から「うず潮クルーズツアー」に招待されるという貴重な機会に恵まれた。間近で見る渦潮の迫力や、世界自然遺産登録に向けた熱意に触れ、生徒たちは大きな刺激を受けた。また、サッカー部も地元農園でのボランティア、地域のお祭りへの参加、小学生向けサッカースクールの開催など、交流を継続的に深めている。	
適切な施設及び設備の整備	A	法令に適合した敷地面積、教室等が確保され、必要な点検等も適切に行った。		